川柳雜誌

十一月號

大正十三年三月二日第三種郵便物認可
大正十四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌 第二卷 第十一號

川柳雜誌　第二卷　第十一號（大正十四年十一月一日發行）

目次

馬行君の白い色を見る……木村半文錢（二）
柳友よ……川柳の畑を耕す男（一）
本事川柳……武笠山椒（八）
川柳革新の第一義……井上劍花坊（二）
柳樽通釋異見……森東魚（一七）
柳翁忌……二柳子記（一〇）
秋の觀心寺……（吟行）……松郎記（二〇）
近作柳樽……麻生路郎選（四）
川柳書架……麻生路郎選（二七）
募集句
舊卵……前田雀郎選（二五）
舊家……林田馬行　矢田右大臣　共選（二五）
各地柳壇……（三）川柳家の戸籍調……（三）
玩具箱……蛭子省一（二八）
川柳塔……（四）
柳路、放馬、松郎、萬よし、刀三、一聲、馬行、輝翠、かほる　二柳子
粒々集……森東魚……蛭子省一（二九）
落伍者（表紙繪）……吉岡烏平　編輯後記……路郎記（三〇）
句作上の常套語……麻生路郎（三）

川柳雜誌

第二卷　第十一號

柳友よ

一本の燐寸が
燃につくすまでに
寒さや空腹が
せまつて來る迄に
わたしたちは
一句を遺しておかねばならぬ。

川柳の畑を耕す男

馬行君の白い色を見る

木村半文錢

馬行君の作品を見て行くと、その句の一つ一つに、影い窃める或る一つのいろを發見する。淋しい――白色それだ。これは白いいろを見る私が　或は馬行君の句の全てに惹きつけられていか感じる錯覚かもしれないが、兎に角統一のある白色によつて、君の句は價値づけられると私は思ふ。

馬行君は純な素質をもつ作家で、そして可なり、句に纏める技巧の旨い人だと知つたのは、何でも五六年も前の事　句會の席上で二三度顔を合はした頃だつたが、餘りものも言はぬ私は若い馬行君に接近する機會がなかつた。その間に馬行君は、新進作家としてよりも、中堅作家　一人として、關西の柳壇に飛躍をする樣になり　益々私は接近する機會を失つて了つた。それが、今川柳塔の一隅によつて、彼とこの交渉を（私一人ぎめで）つゞけ得られる事は　私の幸福である。

馬行君の句を作る旨さは、一寸岸本水府氏の出現當初に近似するやうである。たゞ華やかな水府氏の領分はないが　そのものの感じ方、句の纏め方、技巧のあち味、一句のリズムカルな點、がよく似てゐたと思ふ。尤もそれは外形的に見た兩者の比較で、本質的には全く相容れぬ個々の領分をもつてゐる、その馬行君の本質的なものが　今云ふところの白い色である。現在馬行君は、この白い色に惠まれた川柳、將來を抱いてゐる。いまごき、川柳の影だの色だのと書いてゐると、氣の早い人達から、一喝を喰ふかもしれないが、まだ暫らくは　白い色味をもつ馬行君として見て行こう。その方が穩當だ

馬行君のもつ白いいろ……それは彼が詩に惠まれたる天分である。この天分こそ、彼が作品の一つ一つに、つき纏ふてゐる淋しさである。この淋し味を追ふて行くと、必ず寂光の色を放ると思ふ。が、それは却々前途のある問題で、輕々しく彼に許される境地ではない。が、併し、そこに角惠まれた作家の一人であらうと思ふ。句の旨いとか、技巧が秀れてゐるとか云ふ、ありきたりの作家とは別に、斯うして彼一人に許されたる特質をもつ事は彼が詩人であり、彼が川柳には詩が窃むといふことになるのである。

今私は、彼の近作に就し、白いいろを研究してみやう。そして、その白いいろが、外にあるものか、内に窃むものか、々同時に解剖してみやう。さうすると、彼の白いいろは　天分であるか、それとも一時の借りものの姿であるかが、少しは鮮明になるであらう。一例を川柳雑誌の十月號にあげる。

(1)人妻として見送りの中にあり(2)ネクタイを結ぶ手付きも秋になり(3)夏服の白い氣持も二三日(4)御近所に素氣なう露路に圍はれて(5)叱られるまで締めてゐる赤い帯

(1)の句は　その取材そのものにも、あゝ淋しさは流れてゐるが斯うしたものの見方をする氏の特質の一つを私はまづ　その句の内容と　しつくり結びつくところの、淋しいリズムに發見する。(2)の句も同じリズムの流動がある。(3)は作家が不用意に自己の白さを物語つしゐる。(4)こうしたものには　多く俗氣の含むものであるが、不思議にも氏のもち味の一色で、何の苦もなく押し包んでゐる。これは『素氣なう』に働く、その特質による。(5)この句、赤い帯が不思議に白く感じ、白く響く

(1)御無沙汰の背變らぬ高笑ひ(2)金々つぶやく一と人横になり(3)臨終の次の瓦斯間の明るすぎ

(1)の句は、前の『素氣なう』と同じく、『昔變らぬ』の特質を發揮してゐる。氏の匿しても、かくし切れない主觀のいろである。(2)は全てに白いいろを漂よはしてゐる。(3)は　餘りにも白さが眼立。

まだ二三の發表句があるけれども、どこかに破綻がある樣で　こゝへはあげなかつたが、さうした作品にも、この統一された一色のめぐみを發見することができる。私は前説に、馬行君の句の一つ一つに、影に潜めるある一つのいろを發見する、と言つたのは、實は馬行君の、茲で書こいろに潜一ついろむさだの換へてみたい。このこいろは、彼から分離の許されぬ、彼一人の特性で、そして彼の詩的天分が、こゝに源泉を發してゐる。故に、彼の作品は、この句材の如何にかゝはらず、この特色が發揮せられるのは當然すぎる程の當然である。

この特色――馬行君の白いいろは、そのこいろから滲むもので　彼の作品が、外形的に見しも、このこいろの律動が現れてゐることを　私は感じる。内容から見ても、その素質と等しいこいろの顯現が見出されるのは、前句の二三の例句にも認め得られた。斯うした時、私はいつも　詩に惠まれた人の作品が、表現即ち内容の一元的であることを認識する。即ち　馬行君の作品がもつ、外形律は、内容律と同じい白さの統一である。藝術は人間を欺くことのできないのは、斯うした場合いつも、私共が受けると　唯一の眞理である。

今、私は馬行君の作品の内容に就て、云爲する事を欲しないたゞ、君がもつところの　許されたる詩的大分が、君のこいろをしつかりと握つてゐることを、久しく逢はぬ君にまで一言お送りするにとゞめる。然うして私は他に侵されない唯一の白いいろの完成を俟つ一人であることを附言する。川柳は、誰れにも作り得られるが、一個の詩の天分は、さうザラには許されないものであるから。

近作柳樽

路郎選

蛤のやうシャボン入れ落ちてあき　神戸　隨帖　眼頭熱くなり疊のめかすむ　同　同
瀧づたひ女たう〳〵足袋を脱ぎ　同　同　ようわかつたこと表へ出ること寒い風　同　同
縫ひ上げし了ふつもりは皆寢させ　同　同　自動車から抱きおろす母のかるい事　同　同
もう一つ曳く氣の俥夫に更けて行く　同　同　水害地のごみ付けた儘汽車が着き　螢ヶ池　屏三呂
賣る本の中の惜しいをすこし讀み　同　同　時の人漫畫に苦い顔で載り　同　同
行先を知つて居らない子の留守居　同　同　僞りの涙を見せて生きてゐる　同　同
バラ〳〵にいゝ荷車を片付ける　同　同　むつこする端書湯の町から屆き　同　同
繃帶が大袈裟過ぎる淺間しさ　同　同　歳月は人を待たぬに飲むばかり　同　同
遠廻りして呉れていゝ友は去に　同　同　眼を閉ぢたこて恐しさが去るものぞ　同　同
獨りものゝ時計のねじを卷いて寢る　大阪　ひろし　年寄に勤める心掛けをほめ　神戸　一閑子
あつたかい飯を食ふ時のみの生　同　同　番臺は流行る着物の値を尋ね　同　同
滿腹は煙草のけむり眺めて居　同　同　事こゝに到つたこを悔ひもせず　同　同
ふいと來た友へ自炊の膳を向け　同　同　子が產きて親の有難さに涙　同　同
遠來の友に妹さんの事をきゝ　同　同　若くして親の有難さを話し　同　同

酒呑めぬこゝわり兩手振つて逃げ　同　同
店番は王手のまゝで立つて行き　神戸　素生
電燈の外へ判屋は顔を置き　同　同
仕立屋は別々の灯で並んでる　同　同
喧嘩して呉れては困る孫と孫　同　同
晝夜帶留守を賴んで締めてゐる　同　同
友達の机に聖書ふと見付け　姫島　眼聲
十八九たゞおかしくて嬉しくて　同　同
四時の鳴るのは知つてゐた遲刻なり　同　同
早起きをすゝめる母に羞なく　同　同
自轉車へ父五十にして乘り初め　同　同
この節季どう過せるか雨が降り　同　同
月代の介添に母汗をかき　大阪　悟郎
淋しさを感じ散歩の足早し　同　同
工事する方へ子供は行きたがり　同　同
看護婦は神興が來たと窓をあけ　同　同
立膝の前に繼子の襷掛け　同　同
御詠歌に合す片手がだるうなり　同　聞路
經濟で負ける日本が案じられ　同　同
打解けた話は着物脫がされる　同　同
氣兼ねをばし乍ら電話借りてゐる　同　同
書齋から疲れた顔で記者に逢ひ　同　同
逢ひたさ見たさに行つて風邪を引き　神戸　南天棒
竹馬を格子にもたせ夕御飯　同　同
石置場こゝ暫らくの野菊咲き　同　同
いろ〳〵な唄を聞きつゝ鳥屋開け　同　同
終列車町中響く笛で發ち　同　同
繃帶をしてから乾兒强くなり　大阪　乾坤
氣に入らぬ婚を近所は不思議がり　同　同
知らぬ名の藝者は隅に畏まり　同　同
思ひ差しまさかと思ふとこへ行き　同　同
手枕は一伍一什を知つて居る　同　同
夏服をよけて丁稚は水を撒き　東京　葩汀
店先の工事喰ひ込む日が續き　同　同
金魚鉢覗いてる顔皆うつり　同　同
白足袋はこまない方へ乘ると決め　同　同
猫人らず死ぬ氣で買つたものでなし　同　同
恩に着ますと二ヵ人に拜まれる　札幌　迷村
村祭り神馬は肥料もひいた鳥　同　同
店先の鸚鵡に屑屋覗まれる　同　同
消燈の喇叭嬉しいものゝうち　同　同
叱られたとも獨りつ兒思つてず　同　同
先刻から默つて見てた不平が出　廣島　露斗
逆樣に意見を聞いた譯でなし　同　同
父親の性分母は諦める　同　同
實家には落ち付き兼ねる兄が居る　同　同
此顏を上げ得ぬ迄の愚ろかしさ　同　同
何事か期するが如く時雨れて來　旭川　志貴南

綻びへ寒さを知つた獨り者　同　同　散髪屋鈎錢出すにひまが入り　同　山月
引き裂いて見ても辻占氣に掛り　同　同　大阪へ柳行李で來た話　同　同
振れ舞つた酒に文句の多い事　同　同　水溜り白足袋水に寫りけり　同　同
夏密柑片手に提げた藥瓶　同　同　懷手從いて行くのも懷手　同　十字路
湯上りの浴衣閣下と見ねぬなり　山梨　天花　衛兵へ空しく月の冴ゆる事　同　同
保險金自活の道を考へる　同　同　雄鬚空しく太平洋を戻つて來　同　同
腹をこはして戻る籤入り　同　同　本當に有つた事をと婦人記者　同　小路
膝枕お湯が湧いたといふ知らせ　同　同　一人丈け日本語一寸わかるよう　同　同
魚屋から旦那いゝ鯛見て戻り　大阪　秀哉　お前だけは僅くなれよといゝ手本　同　同
口留をされたがあとをチト濁し　同　同　助太刀は危くなつて見て居れず　神戸　枝呂
湯上りの浴衣十時を輕ふきゝ　同　同　暗がりにすると女のあはてやう　同　同
出勤の父と末つ子飯を喰ひ　同　同　盜人の足を打拔く釘を植へ　同　同
飛石の盡きた所でつゝじ咲き　螢ヶ池　逸錢　なりゆきは親の意見の通りなり　大阪　助六
二階借り今日はしのだを取るつもり　同　同　見込まれて鮮人萬年筆が要り　同　同
文化村今日も肥料の風が吹き　同　同　寒むなつて母の日暮のいそがしさ　同　同
亭主又隣のあらを聞かされる　同　同　ブランコを押してやるにも親心　同　憲翠
馬の顏立話しろと後へより　大阪　南羊子　假橋で面目のない人に會ひ　同　同
おこられた場所で子供は寢てしまひ　同　同　輪松屋に當身をくつた犬が吠ね　同　同
では行くと決めて女房髪をとき　同　同　殖ねて行く金に世間を怖く見る　神戸　夢遊
病上り眼だけ大きくなつてゐる　同　同　蚊柱を見てるとひよいと郵便屋　同　同
病上り一貫減つた事を知り　同　靜雲　法廷へ出す氣默つて歸つて來　同　同
お隣の夕刊を借る交番所　同　同　消防署昨夜の泥を流してる　大阪　靜流坊
結ひ立ての鏡へ一度笑つて見　同　同　洗濯の背へ昨夜の禮を云へ　同　同
行水はあつらを向いたまゝ答へ　同　同

姉さんの下駄でカチワリ買ひに來る　同　同　新町へ出す氣でも無い娘にしこみ　大阪　凡平
聽診器目かまひそうな息を吐き　神戸　一狂　立腹の片手で涙金を受け　同　同
彼女の死雨蕭々と降つてゐる　同　同　心から惚れた女の母が來る　神戸　琴月
蓮池の蛙死んでるやうにゐる　同　同　子が出來る頃は一家をかまへる氣　同　同
廣告に呉れた前掛重い事　大阪　炭車　悲しくも殘つた玉子數へてる　大阪　夢坊
倒けた子に母怒る事〳〵　同　同　舊い家に勤めましたを妻に持ち　同　同
若旦那お顔を見れば四十代　同　堺　佳鳴　富豪の家に育つて痩せてゐる　鶴の莊　曹天
常夜燈先祖の頃を偲ばせる　同　同　旅馴れてだんだん荷物小さくなり　同　圓
わたしかて同じですわと慰める　同　同　ぶつかつた巡査自分で許して行く　東京　奇骨
金のないそれがお前の爲だらう　同　同　彼女亦嘘と思つて居たらしい　勝湖里　仰天子
自動車へ乘りても母は遠慮勝ち　同　函館　里魚　散髪屋政治の事も心得て　大阪　のほる
赤蜻蛉つるんだまま屋根を越し　同　同　頷付かぬ顔に說明念が入る　勝湖里　辰進子
壁床へ經驗を云ふ見舞客　同　螢池　花ヶ泉　還境に舊家段々忘れられ　東京　清春
道問へば私もそこへ行きまする　同　同　父の死ぬ迄は內氣な娘だつたに　畑迫　木屑
ふと見かけ敬意を拂ふ間を逃がし　同　神戸　濁水　三味線屋糸の調べでつんとする　臺灣　白灣
背子兒は眠むり首だけ落ちかゝり　同　同　同じもらうなら美しい娘をね　大阪　啓坊

▲**吉岡鳥平氏より**（前略）案山子は俳句のものですが私のれらひ所は、案山子に無くラヂオを張つた文化村が近くに建つ時代になつても案山子には相變らず弓を持たせて居る、人間は餘りに雀を馬鹿にし過ぎて居るから却つて雀に馬鹿にされると云う人間對雀の葛藤にあるのです。雀も矢ッ張り「落伍者」として置いて下さい。

▲**河南放馬君より**　御病氣と聞いてゐましたがお尋ねもせず失禮してゐます　其後何うですか。放馬も相かはらず酒を呑んで仕方がないので弱つてゐます　酒の加減で寒くなるとリウマチスが押し寄せて來ます。酒は百毒の長だと思ひます。先生の病氣も酒が原因の一部である事を想像してゐます。川柳雜誌社はこぞつて禁酒斷行したらと思つてゐます。人は二三合で止めて置く樣に云ひますが放馬は其の量は一合でも一升でも二升でもトニカク醉ふのが程度です。最もいかん事やと思ひます。放馬といふ雅號からしていかんと思ふのでかしこうなりついでにいゝ雅號があれば變へたいと思つてゐます。してそあれば酒を見るとフラ〳〵が來て頭が痛くなる樣な藥は無いかと思つてます。トニカク御自愛專一にして下さい。先は御見舞まで亂筆にて御免

▲**堀楓林君より**（前略）貴誌のお言葉に從ひ當社雜誌創刊の年を記念に今後毎年川柳翁忌を營む事に決定昨廿三日午後一時より當社（柳陰社）で川柳寺と申して居ます當町（田邊町）龍泉寺に於て追弔會を開きました先は御略旁御報まで

本事川柳（四）

武笠山椒

（六一）栗の錢茄子の錢はごまうからず

巷談贅說文政八年の所に出て居る。栗の下に（丹波）と註し、茄子の下に（駿河）と註してある。栗は領地の關係で靑山下野守を謂ひ、茄子は同じ關係で水野出羽守を謂つたものであらう。共に當時の權門で、水野は賄賂を貪り、靑山は貪らないのを諷したのである。

○

（六二）蜻蛉も異國へさんでおさへられ

同文政十二年、天文方高橋作左衛門一件の所に出てゐる。作左衛門は有名な天文學者高橋東岡で、彼が新智識渴仰の餘りに竊に國禁の日本地圖を和蘭人ジーボルトに贈り、事あらはれて獄につながれ、終に牢死した事は當時やかましい問題であつた此の句で蜻蛉といつたのは其の日本地圖の事であらう。

○

（六三）古いたち又出て寺を騷がせる

（六四）てんのな、災ひなぎゝ寺でいひ

同書文政十二年の所に出てゐる　前文『淨土宗門檀林の內取締宜しからず、無格の色衣を知るし、其外不埒の事ありて御吟味あるにより、今年丑（文政十二）の十月二十四日、脇阪中務大輔安董朝臣、御奏者番寺社奉行加役再勤仰を蒙られ御吟味の上芝增上寺大僧正寶譽俄に隱居仰付けられ候一件に付、新田大廣院自害ありて追々御調相濟み、翌寅年三月八日增上寺隱居寶譽再住仰付けられ候』

脇阪安董の寺社奉行時代は、僧侶の取締が嚴重なので有名であつた『そりや出たと坊主びつくり貂の皮』といふ句もある。脇阪の行列の鎗には貂の皮が藏つてあつたのである。鼬の古いのが貂になるといふので、初句では古いたちで脇阪をきかせ、次の句は言ふ迄もなく貂を天にきかせてゐる。

○

（六五）二見附火焰伯耆ではいてとり

同書天保五年火事の記の條。記の文によれば、此の句は同年二月十日大名小路松平伯耆守邸から出火して大火となり、鍛冶橋數寄屋の二門も災に罹つたのを云つたものと見ゐる。此の頃ぐわゐんばうきといふ箒があつて、それをかけたものではないかと思ふ。

○

（六六）水が引き加賀出てこまる林かけ

同書『二見附』の次に並べて書いてある。後文に『此頃御老

中水野出羽守殿大病のよしにて登城なかりければ其跡御勝手掛は大久保加賀守殿と專らに風說せり。林かけは林肥後守殿をいへり』御勝手掛老中は會計を司るから老中の中でもはゞが利いたのである、林は後任の候補者に數へられて居たのであらう

○

次は仙石騷動に關する句。

仙石騷動といふのは、天保の頃但馬國出石の城主美濃守逝去して、其の子道之助幼少なるに乘じ、家老の仙石左京が威福を擅にしてゐるのを、河野瀨兵衛、神谷轉などいふ忠臣が匡救を謀つた所河野は殺されてしまつた。そこで神谷は身を退いて虛無僧となり江戸の一月寺に隱れてゐたのを見つかつて縛られそれが動機となつて幕府の取調を受ける事となり、其の結果は左京は獄門、其の子小太郎は遠島、其の他連累の者はそれ〴〵所刑され、轉以下の忠臣は構ひなしといふ事になつた但し申渡書の表には、此頃世間で噂をしてゐた樣な幼主を殺して己の子を其の跡目に立てるといふ類の企てに關しては何も言つて無い

○

(六七)御治世にせんごく噺し大流行

仙石を戰國にかけた丈の句。

○

(六八)苗字なぞ殘して置けと御意になる

「苗字なぞは仙石いたし也」と註があるけれども、誤字でもあるのかよく分らない『なぞ』は『なと』らしい。

○

(六九)永樂が引込み百が出るさうだ

『永樂錢は仙石の紋、百は新錢百文錢の事也』と註がある。『引込み』とは此事件について藩主道之助は所領を半減された上閉門に處せられたのを言つたもの、新錢は所謂天保錢、天保錢の通用の始まつたのは天保六年十月、騷動の一件落着したのは同年十二月。

○

(七〇)五萬石永樂錢をおもひしる

『仙石高五萬八千八十八石餘』といふ註があるが分らぬ。

○

(七一)丸に無の字にならぬへりやよし

『丸に無の字仙石の紋也』といふ註、所領高を半減された丈で、丸で無くして仕舞つたので無いからまあよかつたといふ意味か。誤寫でもあるかよく分らぬ。

○

(七二)神龍も鯉にすはれ骨計

鯉は貂の皮の關係で脇坂中務大輔、此の一件の調掛長であつた。吸はれるとは取調を受ける事であらうが、神龍とはなぜ言つたものか分らぬ。(未完)

柳翁忌

九月十八日夜　於端之坊

九月二十三日が百三十六回忌に相當する柳翁の偉業を追慕するため、九月十八日夜例の端の坊に於て其記念句會を催しました。（二柳子記）

路郎、紋太、文錢、悠々、一路、ひろし、放馬、獨眼坊、秀哉、萬よし、みのる、乾坤、塊佛、佳鳴、春三、山月、泗水、長門守、太平樂、雄峰、聞路、突支坊、鳶歩、青影子、文久、百雷、三次三平、夢路、蹄二、子行、助六、刀三、十字路、輝翠、秀雄、鳥平、二柳子、啞人、松郎（名簿より）

皺（兼題）　路郎選

たまに來る母は額に皺をよせ　ひろし
からびらへはつきり皺が殘さる　かほる
漫畫では額の皺がよく目立ち　百雷
生醉の皺をのばせば五圓札　塊佛
皺よせて山着羨なくしまり　助六
急かされた化粧に皺が明らさま　秀哉
思出はあの恩人の顏の皺　松郎
絹糸の樣な年頃の皺をみる　一路
子の寐顏父滿足な皺になり　子行
子を抱いた亭主氣にせぬ皺かな　啞人
笑合ふごつちもおなじ程の皺　佳鳴
美容院皺を伸せを持余し　新坊

五　容

大寫しかくしきれない皺が見へ　蹄二
皺くちやにしたいだづものを吾子　文久
外套の皺を見乍ら醉ひも醒め　紋太
風呂敷に果物らしい皺が出來　春三
フロックに此春からの皺がつき　悟郎
（人）名乘り合ひて額の皺も親れし　十字路
（地）新聞の皺に不敬の事多し　文久
（天）おまい等の爲にこの皺よせ云ひ　長門守

大　水　紋太選

大水の後で村費の酒に醉ひ　雄峰
大水に土手長々と見へるなり　秀哉
大水に老母はお寺へ逃げたがり　突支坊
大水に今日は茄子をとり損ね　刀三
大水に二階暮しの日が續き　太平樂
大水に早瀨の塲所かちと變り　輝翠
大水に蟹ばつきりと横に匐ひ　路郎
大水の話も孫は恐はからず　百雷
大水に橋の擬寶珠が搖れて見え　文錢
大水のでさうな宵を寢つかれず　同
大水の闇から闇へ風の音　塊佛
大水に小作爭議の田がかくれ　同
大水のこゝまでついた道を行き　佳鳴
大水のたんび氣になる土地に住ム　同
大水の電柱ほつり〳〵立ち　飯山
大水の嘆きの中に深む秋　同
大水のあさい所へ船で來る夢　路
大水へまた降つて來た戸を締ち　同
（人）大水の中にまします石地藏　飯山
（地）大水に父はかすれた聲になり　子行
（天）大水の跡へ吊皮伸上り　春三
（軸）大水のひざ中々夜が明らず　紋太

本　店　松郎選

軒切りで本店妙なことになり　飯山
方針を更へて本店また探めを　輝翠
本店は支店同士の探めをきゝ　文錢
本店へ來て迷兒のやうになり　悠々
本店の張塲から見る化粧壁　刀三
本店の横へ大きなビルヂング　放馬
本店で問題になるタイピスト　泗水

本店へまでの夜汽車にほつこる　子行
本店へまで自轉車輕く乘り　同
(佳)本店と同じ値段が賣れ殘り　助大
(佳)寢直日誌本店の電話だけ　萬よし
(佳)本店で聞けばうなづく點も　十字路
(佳)本店が椅子になるのも近い　路郎
(佳)支記人支店の事で解ふて來る　子行
(人)本店は碁盤を据ゑてあるぱか　路郎
(地)何事もなく本店でもてなされ　紋太
(天)本店で久々會ふ御寮人　刀三
(軸)本店へ來て給仕さん〳〵　松郎

封切　互選

封切の此廣告にあこがれる　青影子
封切に丁稚と丁稚よく喋ぶり　助六
封切を隣同士で客を呼ひ　子行
大和路へ封切が來が一年目　萬よし
封切へ松木狂郎こちらるなり　かほる
封切の何時か見たのと以てるなり　松郎
封切の今日大人を高くあけ　文錢
ちと無理な封切をする常設館　夢路
封切に裏切られ出てのむ煙草　ひろし
旅に出て封切二度も見せられる　百雷
封切の人氣丈け見て戻つて來　放馬
封切にちと先立つたプロマイド　秀哉
封を切るまでに夕刊素破　挂き　春三

封切に自分の會社現はれる　山月
封切と號し塲末を馬鹿にする　悠々
筋書と封切少し變つてる　獨眼坊
若旦那封切ばかり見てるなり　聞路
封切を子供の方が先に見　太平樂
封切を他所に熱海へロケーション　刀三
豫期してた程に封切賑はあはず　輝翠
誘はれて來た封切に生欠伸　乾坤
封切の一ケ所だけて客を呼び　同
封切の豫告は海を越へて來る　蹄二
封切に巨彈巨彈驚かせ　同

バイオリン　互選

バイオリン上手に彈いて風心地　助六
バイオリン彈いてる下へ泣で來る　三平
バイオリンまだやゝこしい音をさ　佳鳴
家付の娘が鳴かすバイオリン　太平樂
バイオリン下宿は膳を下げに來る　飯山
糸切れたまにバイオリン年を越し　雄峰
バイオリン帶をだらりとさしてる　松郎
バイオリン樂譜へ上目してるなり　聞路
バイオリンあかい街から街へ拔け　文錢
ちと野心あつてひねもすバイオリン　塊佛
バイオリン脇へはさんであらはれる　一路
バイオリン四五册賣れ塲所を替へ　啞人
バイオリン手馴れた曲つ輕く待ち　秀哉

バイオリン提で息子の置手紙　青影子
競買で二圓で買ふたバイオリン　ひろし
バイオリン絶え入るやうにふるへ　蹄二
バイオリン旦那のいやな音を立て　同
バイオリン日燒けの腕をおしぬ　子行
バイオリンいづれおとらぬ面構へ　同
バイオリン按摩が欲しい姿なり　悠々
バイオリン流行唄だけ物になり　同
この腕の太さを見せるバイオリン　放馬
バイオリン名手へ不良がつて來　同
バイオリン時分はよしと張あげる　乾坤
バイオリン闇から闇に流行らせる　同
バイオリン今絶頂の音をさせ　紋太
バイオリンいざこ構へてうま合ひ　同
バイオリンゆるうく彈ひて滅入らせ　同
バイオリン聞ける範圍へ本を賣り　春三
バイオリン窓からすべりさう彈き　同
バイオリン人の居ぬ野をあるいて來　同
バイオリン琴と合はすに坐らされ　夢路
バイオリンはるかへだてた音になり　同
バイオリン話掛けると爪で彈さ　同
バイオリン青葉若葉に風があり　刀三
バイオリン授業料だけ納めて居　同
バイオリン別れてからの埃りなり　同

川柳革新の第一義

井上劍花坊

川柳革新といふことほど酷罵に口にされ易く、しかも行ふことの容易で無くこれを說明することが面倒で、聽く者の誤解を生じ易いものはありません、今度の旅行中でも各所で講演をしましたが、水が砂に浸込みむやうに素直に聽いて下さつた方ばかりかと思へば、中には妙な色眼鏡を掛て、變な方面から廻り遠く解釋をして、それが恰ご故意に聽きひがめたさしか思はれぬやうなこともあるのです。何とかして川柳革新の第一義を、わかり易いやうに說明しられないでせうか。

川柳革新といふことは、川柳といふものを別にして、他に或は短詩型・或は長詩型・或は一種の散文詩型・或は異つた韻文詩型を作らうといふのではありません、大和民族の持つ固有の言語日本人種にあゐ即興的詩想から生れたやまとうた、連歌・俳諧・川柳と傳統された一種の短き詩を、より善く革新して、世界的の物にしやうといふのです、世界的です、法螺ではありません、眞面目に命づけて世界的といふて恥しくない物にするのです、これまでの川柳、即ち古川柳中の特に島國的な、野郎自大的骨董的な、安價な享樂を命とする物を踏襲し、摸倣し、傳習したものをこれが大正の川

川柳家の戸籍調べ

□係　馬行生

（一）姓名（二）雅號（三）別號（四）現住所（五）生年月日（六）職業（七）好きな句（八）好きなタイプの女（九）自信の句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配遇者の有無（一二）嫌ひなもの（一三）川柳に手を染めた年月

（8）川村花菱

（一）川村正平（二）花菱（これは他の雜誌にも書きましたが學生時分の脚本朗讀會をやつた時、自分以外の友達はみん紋付を着て居るのに私丈けが無いのを、足立朗々が自分のを脫いで貸して呉れましたその紋が花びしであつたのをそのまゝ雅號にした所その年の暮に當時金百圓の懸賞脚本に當選したので、その後花菱の名に由つて、拙文が他の雜誌にも載せられるやうになり、又小づかひも取れると云ふ誘惑から、とう〳〵十七八年間使ふ事になりました）（三）牛込築土前町の生れなので築土生と洒落れて雜文などを書いた事があります（四）東京市外千駄ヶ谷七

柳である、二十世紀の日本の詩であるこ、世界の詩壇へ持ち出すことが出來ませうかそんな恥じいことは出來ません、是れ私共が革新を高唱する所以であります。

人、或は謂ふでせう、江戸時代の川柳に於て見るところの滑稽、諧謔、諷刺、洒脫、都會趣味、遊樂氣分は世界唯一の物である、それを妄りに外來思想にかぶれさせ、西洋臭くするのは冒瀆の甚だしきものではあるまいかこ、是は其一を知つて、未だ其二を知らざる者です、古川柳が江戸時代に於て世界唯一の物で有つたことは誰でも否みはしません、川柳ばかりでは無い。和歌でも　俳句でも漢詩でも、小唄でも、乃至謠曲でも、淨瑠璃でもいづれも當時の物は當時に於て世界唯一の物だつたのです。征夷大將軍こ云ふ專制君主が、人民を見るこ土芥の如くであつた當時に於てゞす、當時の人民卽ち我々の先祖も亦因循卑屈束縛を恨みず奴隷に甘んじ、人爲の道德に則り個人の尊む可きことをも自覺しなかつた時代に於ての世界唯一が、今日の時代の世界唯一こして、誇り顏にひこ前へ出せますか、私の川柳革新は、單に寶曆明和以後の我々が稱して古川柳こいふ物に向つてだけ革新を行はんこするのではありません、素戔男命以來　日本武尊以來、我々の先祖が持ち傳へて、連歌こ稱し、俳諧こ稱し、前句附こ稱し、川柳點こ稱して居たものに向つて、果斷な斧鉞を加へんこするものです、さうして其中に潛在して居た生命をこり出し、世界的に復活させんこするものであります、大阪の土地に出る刷物の中で　私の講演の聞きひがめをしたものが有つて、中にはそれを信ずる者があり、大阪に居る革新主義者は甚だ迷惑をする、こいふことを私の友達に云つて來た人があるさうですから、關西の川柳雜誌こして、最も權威ある貴誌を借り、聊か持論を繰返した次第であります。

(一一)(五)明治十七年二月二十一日生(六)劇作家のつもり(七)武玉川中の句の數々(八)總明の光りが眼の中にうかがはれ、それで居て極めてもろい女らしい急所を持つた丈夫な女(九)自信のある句は、要するに他から見て價値のないものが多いこ云ふ經驗を持ち乍ら、やつぱり私は主觀的の句を自分ではいゝこ思ひます「已れ一人の爲でもあるまいが涙雨」一不良少年のやうに蝙蝠が飛び」なんて句は好きです(一〇)鐵砲打ち――たべられなくなつたら、かりうぎにならうこ云ふ事を眞面目に考へて居ます(一一)完全無欠のよい女房が居ります(一二)辯護士こ壓へきれない自分の卑しい心持(一三)若い時から川柳(狂句こ云つて居ました)が好きで眞似をして居ましたが、川柳詩社の前身矢の木會を駒井美の作こ創めた頃から伊東夜叉郎森東魚なごに敎へられて研究こ作句に親しんだのですからまだ六七年しかなりません。勿論その時分は武玉川のムの字も知りはしませんでした、因に曰く、我が川柳界にはじめて武玉川の存在を知らしめたのは巖谷小波さんだこ夜叉郎からきゝました。(二五頁へ續く)

川柳塔

○　岩崎柳路

院長の宅へひそかに未忘人
不足稅馬鹿〳〵しくも女から
嫁しづいてからもタイピストは勤め
親旦那金庫の符合にはかごらず
犬小屋の上にコスモス延びてゐる
湯治場へ紅葉全葉忘れて來
戀を知る頃妹は死にました
軍服に抱かれ小供は嬉しがり
足洗う娘こ娘にぎやかさ
手切れ金等はいらぬこ女泣き

○　河南放馬

福引きに矢つ張り運の無い女房
握手して大阪辯で云ひつづけ
母さんは清書の點を讀んだ丈け
見學が去んで女工のしやべる事
金物屋何をこつても音を立て
早や次を掛けねばならぬ保險料
獨り者へ隣の通夜が聞へて來
テク〳〵こ歩いて姑戻つて來
ひどい事死人罪をきせてゐる

○　塚崎松郎

一金百圓也を借り倒ほし
貰はれて來て　都〻逸の順が來る
矢絣の膝を轉がる青みかん
御悋氣のとこへ髪結迷惑な
思ひ出の鳥籠があり一週忌

谷崎氏の痴人の愛を讀みて

ふとさめてみるとナオミの素つぱだか
罪のない落度醉ふてる事にされ
魂がすつかり抜けて靴を履く
新町に好いのが出來て冬近し
出し抜けに唄ふのへ三味まごつかず
居續けの襲着で見る日向雨
連れ彈きへ向くあーさんの爪揚枝

○　庄萬よし

縮緬を着せて見つとも無い娘
お使がすんで椽まで拭いてくれ
兩方から附き合ふてゐる茶屋遊び
片付ける事だけは知る女房なり

○　井上刀三

掌へ隱れるものに金があり
鄕愁はおんなじ樣な山が見ね
戀人の氣質が判る膳の上
叱られてまでする母の水仕事
鏡も恐ろしきものゝ一なり
裏切つた女よ人の子を生め
月給を父はすまない樣に聞き
結極は淋しきものよ二十代
戀人の情けは足袋を買ふてくれ
逆ふ事によつて生きる男なり
戀の疲れズボンを敷いて寢る
出戻りの苦々しくも笑ふ事
古本を賣りに出る日の麗かき
冷かに整理してから辭職する
物干は母の脊丈が判るとこ
罪の子は西洋菓子をあてがわれ

○　太田一聲

先生も誓文へ來て慾が出る
口止を痔癪すくに破られて
辛棒は誓文へ行く金も出來
繃帶を見せて欠勤する氣なり
植木鉢肥料ききすぎて枯てゐる

○　林田馬行

タオル二筋下る二階の留守へ友
木犀が近ふ匂ふて客ゞ椅子
青樓の朝重貞いまだ確かにて
繃帶を首に洋書の二三册
逢ふて歸つた友の手紙が着いてゐる
肩の手がすべり明日また逢ふ話
息子もう生活へ批判めいた口
加害者に遠く電車の灯が走り
祭の子ほんゞに眠うなつて寢る
被告はゞ洒落れて傍聽歸るなり

いそ〳〵ゞ忙く髪結に旗が搖れ

○　森田輝翠

一度は死のふゞもした私です
親切にされて氣を揉む年になり
頭から嬲る心算の値を尋ね
もう親は目放し出來ぬなゞ思ひ
つきあへば顏に似合はずくだけてゐる

○　高橋かほる

板張りに五本の指の當る音
板張りは其儘悲劇幕になり
盃洗で指が濡れるも安藝者
ポプラの樹わさびに見へて冬になり
初獵の上着へ芒觸はる事

○　橋本二柳子

空想が二三日續く獨り者
セコンドの音ばかり博士は默つてゐる
紅葉の色に炬燵をしたしまれ
團体が團体を見るよい日和
子供達ふざけて母に突き當り

柳樽通釋異見

森　東　魚

誹風柳樽通釋の第二編が發行せられた、愈々著者武笠氏の努力に敬意を拂ふ次第である。私は通釋の初編に關した異見を先年本誌に發表した。再び著者の寛大になれて茲に二編通釋に關する異見を申述べさして戴かうと思ふ　盲人蛇におぢざる振舞を敢て寛容を願つて置く。

（七）　通もの將棋をさすもあはれ也

下司な將棋を通人と云はれた男が落魄して床屋なぐでさしてゐる、如何にも氣の毒である――と云ふ解であるが　私は根本の意味合が違ふやうに思ふ、通ぶ者は町内で知らぬ者のない能樂手あひで謂はゞ『八笑人』に出て來る人物だと思ふ　いつも何かしら飲み口にありついて良い景氣上機嫌で押廻してゐるやうな奴が、今日はごうした事か店さきなぐで將棋をさしてゐる何處ら旨い飲めるやうな口がないと見へて不景氣な顔色でお手は何　なぐゝやつてゐる　奴め今日は揚つたりだな――と云ふ

（九六）　惣仕舞いしゆがへしにはきれい也

振つた女郎を除いてあとの女を總揚にして意趣返しをするとの解であるが不あしらいな家に對して總揚にしてペコ〳〵頭を下げさせると云ふ方であらうと思ふ。

（一一九）　口上のたびに手拭肩をかへ

花會なぐを頼みに來た蔦の者が一軒出ては、肩の手拭を左へ掛けたり右へ掛け替へたりする樣に解されてあるが、すぐにもひつくり返りさうに割賺でかしこまつた若い者が、親分からの口上なぐ何か申述べてゐる時に、喋り剛れないものだから癖のやうに手拭を右へ掛けたり左へ掛けたりして、ちッと落付いて喋れない可笑しい樣子をうがつた句だと思ふ。『口上のたび』がそれだと變だと云はれるであらうが『一ト言〳〵云ふ度に』と云ふ程の意味と解して差支ないであらう。

（一三二）　何かしら笑つて歸あら世帶

來る客もノ〳〵きつと何か笑つて歸へつて行く、と解されたが、笑ふのは新世帶の主人公夫婦だ、思ふ、よくお揃ひで出掛けるが又何だか知らぬが笑ひあつて睦じさうに歸へつて來ると、ちと御近所が羨んだ場合であらう。

（一八二）　泣出すごうばはたが屋ごろつぱんし

たがかけのたがの跳るに驚いて泣き出したので乳母が怒つて談判するこなるが、私は　寢せつけてゐた窓下で、たが掛けがトン〳〵叩くので泣いて目を覺したのを乳母が怒るのであらうと思ふ。其方が事實にある事と思ふ。

（三一二）　ぼんおごり最ウちつこのがおんご取

もうちつこで女になる十三四歳の娘――とあるが恐らく脛もあらはにきび〳〵踊つてゐる、もうちつこで……バレがかつたもうちつこではあるまいかと思ふ。繪畫的で面白く、バレ味が何とも悪く響かないやうに考へる。

（三一八）　ほたもちをいさぎよく喰ふ嫁の里

嫁が實家へ來たのであらう――とあるが　嫁ヶ惱ました姑婆あさんが死んだ四十九日の牡丹餅、そこで『いさぎよく喰ふ』であらう。

風の神せなかをながすすがた也

風の神送りの行列に風呂で脊を流すやうな所があつたのであらう――この解である。私は畫に描いた風の神の袋を脊負つた工合が　風呂で脊中を流す――自分で手拭を兩手で引つ張つて洗ふ――その樣な格好に似てゐることであらうと思ふ、『二王樣二人ならんで熱湯好き』などの類。

（四六七）　いたゞいてのむもくやしき山歸來

『亭主にうつされた梅毒』とあるが人物を女房にする必要はなさゝうである、寧ろ男の方が滑稽味がある　エ、いま〳〵しい目にあつたと山歸來ぜいたゞいて呑む所に可笑味がある人物が金をつかつて遊んだ當人でなければ、『口惜き』がきかないと思ふ。

（五一五）　此頃はごほうもないこたゝく尻

女の浮氣沙汰を聞いた男が女の尻を叩く――場合と解されたが浮氣沙汰さまでなく、すつかり女になりきつた物ごし、肉付ごうも素的だなと……男を惱殺するなと云ふ位の意でからかう場合であらう。

（五一三）　あたりからやかましくいふ年に成

年過ぎた娘が、達者自慢の年寄か――とあるが、息子の方が適切に考へられる、もう嫁を持たせなけりやならないと親類共迄が心配する年になつたと云ふのだと思ふ。

（六二一二）　尺八にむねのおごろくあら世帶

門の尺八、それが戀敵ででもありはせぬかと不安になる、自分

達を敵と思ふやうな人は、はつきり心當りはないが何だか不氣味な氣がすると云ふ心持ちもあるやうに考へられる。

（歌仙の部）

番船は風の手柄ぞ猿田彦

猿田彦は伊勢の二見ケ浦の沖に漂着したと云ふ傳説があるのに關聯してゐるやうに思ふ。

食辨慶の尻のおもたさ

人の取卷になつて飲食する奴が、大食の親玉かとあるが、今でも『仕事幽靈　飯辨慶』と云ふ事を云ふ。それであると思ふ。仕事はろくにしない、はき／＼やらないが、食ふ段になると人一倍やらかす、ごくつぶしな奴の尻の重い事であると云ふ意であらう。此の外『まんざらな腰ケ禿は押しならひ』及『百旦那もろ・こしをむく如く也』の二句については『よのころ』の第二卷、八號、九號に愚見をのべた事がある、著者に見ていたゞく折があれば、御一讀の上此の句の御再考を願ひたく思ふ。一と先づこれで筆を擱く事にする。（大正一四・一〇・一〇稿）

粒々集

柳風スポーツ（三）

森　東魚

コーチャーが喚けばピッチぢろりと見
作戰にナインは肩と肩を抱き
スクキーズの眼は口程にものを云ひ
バッターの必死は帽をぬいで立ち
フルベース廻り燈籠らしく馳け
自由打の是れ見ろと云ふ飛はしやう
キャッチャーのナイスストップはすわり
背を一ぱい打たれてピンチバッター出

持病の悲哀

蛭子省二

カ一ぱいに注射器を持つ妻
コスモスへ達磨の軸が選まれる
永住の氣になつて脊延びする夫婦
寄附金の男に袴貸してやり
玩具といつしょに片つける巾着
座布團を二枚重ねて呑直し

◇秋の觀心寺◇

第一日曜の上に天氣は良し日柄はよしといふ十月四日の一日を、我社主催で意義ある吟行を催した。當日は主幹路郎氏が風邪の爲不參されたのは淋しかつた。が恰も來阪中の名古屋加藤溪水、東京佐藤二天氏の二珍客が參加されるなど一行は頓に賑はふた。

一行の携帶品について面白い事が多かつた。寫眞機携帶の山月カメラ技士は觀心寺境内に於て一行の撮影をやるとバックがどうのヒントがどうのと知つた顔の松郎に何かと注意をされて、多少まごついて痩技士の体であつたが、その松郎は撮影どころか寫眞術なんかの智識はから駄目である事が當人の自白で知れてなあんだ。それにしてもお人好しの山月技士殿。

お次は釣道具をかたげて行つた助六大公望、途中清流を見付けて、いざお手際といふときにかんじんの糸を忘れて來た事に氣附いて大公望地太ン駄を踏む、楠公の神罰覿面。

その他道樂宗染みた松郎の判取帳、のぼる輝翠の同じく判取帳、白鶴王、萬よしの魔法瓶に入れた上燗、等々。

一行中の若旦那かほるさん、あのお優しいおみやで約二里の山道を利久履で終始先頭隊と肩を並べてコツ〳〵そのお達者なことわいな…。

觀心寺から延命寺までのけはしい山道を終始遲れ勝ちの溪水、二天、松郎の三人が「さあこれから駈足か」とか「三日市までもう二十丁だつて、なあんだまだ三里もあるかと思つた。」なんて口ばかり達者で、足はどんじり。雜草茂れるとある曲り角のところで雜草に一枚の紙が結びつけてあるので手に取つてみると「悲觀の餘自殺致可候 刀三」と本人のいたづら書に三人聲を合して南無阿彌陀佛〳〵〳〵。

三日市から歸路の電車内で、夕食の懇親會をやらうとの發議で幹事の一人が會費を場所の投票を求めた。その結果を發表すべくある幹事からこんなものが廻つて來た。

宣告

被告井上刀三外十名ニ對シ判決ス
被告全部ヲ空腹劑ニ處シ戒橘丸萬ニ拘ノ上すき焼ノ刑ヲ行フ
尙追徵金各二圓也。
幹事

之が一巡してから見ると裏面に「腹罪ス刀三」「追徵金輕きにより檢事控訴を爲す乾坤檢事」とあつた。(松郎生)

延命寺にて (前列向つて右より)萬よし、のぼる、敏子、馬行、助六(中列右より)かほる、二天、突支坊、輝翠、双柳、松郎、二柳子、刀三、泗水、溪水、一路(後列右より)塊佛、ひろし、乾坤(山月氏撮影)外に參加者、芦穗、光太樓の諸君

坊主持（兼題）　松郎選

坊主持中々來ずに暮れてくる　ひろし
一ぺんに二人に遭ふた運を褒め　山月
坊主持さう〳〵順が來さうなり　二柳子
坊主持近道へ來てそれっきり　二天
不公平坊主の知つた事でなし　芦穂
坊主持はしやぐ連れに汗を拭き　乾坤
坊主持さりゃ知らずやつてくる　塊佛
伊勢參り女だてらの坊主持　溪水
足元がついるすになる坊主持　かほる
坊主持そろ〳〵墨痕になつてゝる　佳鳴
秀才の毒舌が出る坊主持　刀三
主持やあ〳〵〳〵で渡される　双柳
坊主持さう〳〵仕舞まで持たし　同
坊主持長谷街道を急かぬ旅　万よし
坊主持神主に會ふ不平なり　同
足弱が一人混つて坊主持　馬行
おもしろい宿が見ね出す坊主持　同
坊主持坊主が外れて持ち續け　蟬翠
坊主持疲れた頃に摺れ違ひ　同
困もやら喜ぶやらの坊主持　同
坊主持おろして衿を直すなり　助六
坊主持栗をこはぐ〳〵肩にする　同
坊主持さう〳〵驛へ出てしまひ　同
坊主持こんなものまで持たさる　一路
有難い出家に見ねて手のだるみ　同
坊主持あれも範圍のうちへ入れ　同
坊主持ちと引合はぬ重さなり　同
よく喋る連ばかりにて坊主持　光太樓
坊主持もたされたのに洒落もなし　同
坊主持代つた時の賑やかさ　同
山をほめ水をほめてる坊主持　同

佳作

はよ來いと言はれて坊主持せかす　助六
笑ひ止む頃に又逢ふ坊主持　山月
坊主持むすびの數を聞いてみる　塊佛
坊主持早ふ代つて口がすぎ　馬行
坊主持廻り角まで諦める　刀三
坊主持すれ違ふまで持たされる　一路
坊主持お天氣なんど調戯はれ　乾坤
坊さんに振りかへらで持ちかへる　芦穂
坊主持口三味線で持ちかへる　かほる
坊主持ようお參りとひやかされ　同
(人)坊主持草臥てる倉庫つゞき　突支坊
(地)坊主持女の溫味殘つてる　刀三
(天)坊主持親切なのは締直し　かほる

選互

竹籔へ尻からげした婆が入り　突支坊
國を出た時とおんなじ籔が見ね　双柳
裏が籔ですからこんな蚊が出る　同
籔をぬけるとまつすぐな埃道　ひろし
竹籔の下で流れは突當り　山月
世の移り籔は一坪程殘り　溪水
靜かなる籔に境界の杭を打ち　泗水
籔へ來た雀搖れながら止まり　助六
光秀は籔から生ねた樣に出る　萬よし
雀は籔に子等は家路に一つ星　同
殘月が籔の彼方で凄く見せ　乾坤
田舍道籔から籔へ暮れてゆき　同
用心をしながら籔で喫ふ煙草　のほる
竹籔は風にあやまる姿なり　同
籔拔ぎたのへばつと陽が當り　馬行
久方の國の話に籔續き　同
季遲れの鶯廣い籔で啼き　芦穂
夕時雨墨繪のやうな籔になり　同
眞つ晝間籔だけ風があらしい　刀三
逢ふて來て通るとと籔の怖くなし　同
轡虫籔へこがれたやうに鳴き　蟬翠
村から村へ帶のやうな籔　同
籔の中風の隱れた音があり　塊佛
暫くは舞臺の籔に人もなし　同
高話して行く籔に風があり　松郎
手の方が先へだん〳〵籔を拔け　同
竹籔がゑらい音して早う寢る　光太樓
風の吹く方へ竹籔ひくうなり　同

納札　互選

手の屆くだけ納札は破られる　一路
納札を貼りに慇々汽車で來る　蟬翠
度々は參られませぬ札をあげ　双柳
納札々聞けば二錢につくと云ひ　のほる
納札は仁王の顏もくそもなし　同
信心の外に納札草臥れる　乾坤
納札に蜩の聲迫るなり　同
國寶の話に納札目立つなり　山月
納札を拜ますやうなここへ貼り　同
千社札どれも貸家の型で貼り　二天
千社札蜘蛛が一匹づら下り　同
納札の貼にくいのに蟬が鳴き　泗水
納札で上足にかける連の肩　同
貼にくいここに納札選ぶなり　助六
納札の他所のを喪めて發って行き　同
納札をすませ石段輕う下り　ひろし
見上げると知つた男の千社札　同
寄せ書の樣に納札貼つてあり　光太樓
繪馬堂を二へん廻つた千社札　同
社務所から眠う納札みてる也　馬行
納札のこんなここにも如才なし　同
納札の銅貨で茶代置いて去に　刀三
仰向いて見る納札の貼りどころ　同
納札の連れおみくじをあげて　松郎
よく喋舌る女を連れて千社札　同
納札にシガンダ一つ落ちるなり　かほる
まつすぐに貼れて嬉しい千社札　同
五右衛門の出さうなここに千社札　塊佛
納札の高さに少し意地が出る　同
鳥さしのやうな手付きで千社札　溪水
納札に肩書のある太皷持　同

各地柳壇　松郎編

▲三福氏歡迎會（倉吉番茶會）

連て來た子供に藝をさせて去に　八天子
女連れだん〳〵後の方になり　溪泉
連彈きの方もだん〳〵興に乘り　京一
連立つて出るを母親嬉しがり　梢露
美しい連子がもさで家がもめ　三福
國府津行髷に結はせて連てゐる　久米一

▲萬よし川柳（第十五回）刀三選

（天）微醉で來て纏つた金を見せ　松郎
（地）こんな事して平民は流行らず　凡平
（人）流行は如何であらうと金を貯め　飯田
流行に三人の母泣いてゐる　殘紅
ほろ醉は電車の中へ風を入れ　聞路
流行を追ふて淋しい暮し向き　乾坤
ほろ醉で出ると母屋の人に逢ひ　放馬
流行に後れて孕むばかりなり　松郎

▲柳翁忌

和歌山縣田邊町　柳蔭社

九月廿三日午後一時より龍泉寺に於て柳翁忌を營み了て宿題の發表、席上吟など中々の盛會、其内路郎先生の選評を左に

レストラン　麻生路郎先生選

客一人まじつて晝のレストラン　二貴肩
幹事だけ後からレストランへそれ　三休
だまつてる客へ女給もだまつてる　二貴肩
マア這入れも止せレストランのかど　愚圖六
レストラン涼しい皿の音にして　茶利吉
レストランライスを取るはいつも無事　三左
レストラン女はすまぬ人に逢ひ　二左
（人）
ナフキンに赤い陽のすレストラン　いの丸
（地）
女給の死聞いて晝のレストラン　二貴肩
（天）
レストラン飢じい母を連て出る　いの丸

句作上の常套語（五）

麻生路郎

（8）「なり」で止めた句

『おく様と言はれて顔が別になり』『芝居見たばんは亭主がいやになり』と云つたやうに下の句を『なり』で結んだ句は柳樽の中にも、今人の作にも決してすくなくはない。

この『なり』は『成り』てあつて『也』ではない『成る』とか『なつた』とか云ふ説明の用語なのである。

—音の句—

朝歸りだんたん家が近くなり

（評）人口に膾炙された句であるから説明するまでもあるまい。この句を讀むと、親父の苦りきつた顔を思ひかべて急に、グラ〳〵ッと眩暈がしさうな息子を想像するに難ないではないか。

うら〻かさ頻りに錢がほしくなり

（評）この句を讀むと、いかにものんびりとした心もちが流れて來るではないか。しきりにかれが欲しくなりと云はずに頻りにぜにが欲しくなりといふところに更にうら〻かさが浮き出てゐるではないか。

今の私達から見れば斯ういふ解釋をつけたいが、この句の生れた當時では通貨に階級別があつて侍は金（きん）を遣ふし、商人は銀（ぎん）を遣ひ、衆天着の連中は錢（ぜに）を遣つたのである。だからこの句は衆天着即ちベランメー黨の聲なのである。果してさうだとすれば今の人が「頻りにかれがほしくなり」として作つたのと何等變らないのであるといふことだけ一言しておきたい。

容分をやめねばならぬ腹になり

（評）まだ結婚させるには事情がゆるさない。それでは、こちらも無人だし、それに本人同士も滿更でもなさうであるから當分は客分といふことにして寄越して貰ひたいと云はれて見れば、どうせ、いつかは嫁にやらねばならぬ娘、そではさう云ふことに願ひませうと云ふことで客分となつてゐたが、何時の程にか娘が姙娠したのである。

半分づゝさすこからかさ戀になり

（評）一本の傘に若い二人。戀でなくとも戀に見にやう。

芋の皮でもむがうかと邪魔になり

（評）元日を控へての臺所の忙しき。男手はもう空いてゐる。亭主所在なさに臺所へあらはれて、その芋の皮でもむがうかと亭主の方では一かど手傳ふ積りが、女房の方ではさうでなうてさへ狹つくるしいところへ、大きな男がのさばり出てその芋の皮をむいでやるから、その庖丁をこちらへ貸せと云つた始末に反つて用事が殖にて困まるといふ光景躍如たるものがある。

—今の句—

鏡臺が尾羽うち枯らす年になり　莢豆

天瓜粉りゆうひの樣な顔になり　かほる

小さくとも子供の下駄は邪魔になり　隨帖

聞くうちにもう貧乏の黒痣になり　元山

信心がゐて寫眞班邪魔になり　放馬

園はれて　持つ盃は地味にない　乾坤
片づけてみると淋しい部屋になり　刀三
電話からさつぱり酔はぬ酒になり　史風
賣られると聞いて娘は小さくなり　春三
エプロンを取れば二人の母こなり　竹榮
金々こつぶやく一人横になり　馬行
圖書館で啄木こなり子規こなり　同

（9）「也」て止めた句

『也』は『成り』よりも多數の例句を擧げることが出來るばかりでなく川柳の用語としても重要な地位を占めてゐる。恰も俳句に於ける『けり』や『かな』にも比すべきものである。この『也』は多くの場合斷定の意味を更に強めるために用ひられてゐるのであるが時によ全く十七音字中にあつて無意味に近い二音字を占め、句の全體を引締めたり、時には餘情あらしめたりしゐる。

—昔の句—

迷ふまいものか持參こはだか也

（評）一方は持參金を持つて來やうといふ嫁、一方は裸なら貰つていたゞきますといふ嫁、縹緻の惡るいのを少し我慢すれば持參金だけでも大したものだから一層商賣も手を擴げることが出來るが、さりとてあの美しい娘が自由になろと思へば金のことなんか考へてゐられない。あゝ、どうしたらいゝか。持參金か裸か、裸か持參金か、いつその事八卦を見て貰つて來やう、といふところ。

風吹かばどころか女房あらし也

（評）「風吹かば沖つ白浪たつた山夜半にや君のひとり越ゆらん」とは上品な格氣であるが、これは又嵐のやうな格氣、嬶所で物の毀はれる音、ガチャーン、ドスーンといふありさまか。

かけ取のゑがほは右の通りなり

（評）右の通り正に領收候也と書いた掛取の笑顏。それが反對にでも行かうものなら「約束の首さりに行く大三十日」となる譯。

もう嘘も息子枯野に及ぶ也

（評）夜櫻を見て來るさいふては吉原へ、燈籠を見て來ると云つては吉原へ、正燈寺の紅葉を見て來ると云つては吉原へ、やがて冬が來た。息子の嘘も枯野の景色に至つては……。

お妾のむつごくれろ〳〵なり

（評）人間の弱點といふものをハッキリと見せてくれた句である。斯うした場合にあゝよし〳〵といふ男の弱さを想はずにはゐられぬ。

—今の句—

種馬になつたと婚の手紙なり　鳶歩
冗談を云ひ捨てにせぬ巡査なり　徹底郎
ひぐるまが御光に見ゐる札所なり　遊二郎
ほぐらいは氷問屋の目方なり　元山
十年も勤めて戸棚一つなり　松郎
弱點の利用胸から去らぬなり　隨帖
丼は邪魔臭かつた證據なり　啞人
風が出た事も名人知らぬなり　秀哉
潰し値にやがてなるべき名馬なり　雅幽
オブラート破れたといふ眼つき也　柳路
俺はもうあかんときめてかかるなり　路郎

『也』で止めた句は多く穿ちの畑にあるらしい。遊二郎氏の「ひぐるま」のやうなこゝろよい感じが出しゐる句は殆んど見當らなかつた。（つゞく）

募集句

卵

前田雀郎選

卵賣りあつさり店で斷はれ　聞路
南洋の話ビツクリさす卵　吐露樓
玉子酒細帶のまゝ飲んでゐる　乾坤
別莊の卵鞄で持つてかれ　悟郎
嫁の里から地玉だと使ひ來る　眠職
無雜作にせんべ屋卵割つてゐる　萬よし
卵屋を眞似て母親一つ買ひ　辰進子
風邪聲に父の藥は卵酒　憲翠
支那卵生では吸へぬものにされ　凡平
洋食をけなし卵ごぢが出來　天花
病み上り蠅の卵に眼が屆き　迷村
また念を押して卵へ錢を出し　笑郎
御見舞の卵達者な子がせがみ　秀哉
見舞品やはり卵にすると決め　炭車
さし足で卵の中を歩かされ　濁水
ふと膳が動いて卵だけ轉び　隨帖
殊更に卵を見舞請合せ　同
遠足は蛇の卵を敎へられ　夢遊
醉ふて割る卵へ力強すぎる　同
末の子に黃味だけを食ふ癖があり　同
(秀)地玉子を見付て歸る藥取り　秀哉
(秀)卵屋を眞似て坊主は一つ割り　清春
(秀)朝の用卵を一つ吸つて出る　普天
(秀)市場から卵は別にさげられる　聞路
(秀)炊事番雞魚寐へ卵の數をき、　南天棒
(人)女房に說かれて啜る生玉子　寢多樓
(地)生玉子椽の障子を開けて呉れ　多聞
(天)たまごがあります讀んだから待たされる　吐露樓

舊家

馬行選

◇西洋の家が舊家の庭に建ち　南天棒
南洋の話ビツクリさす卵　吐露樓
玉子酒細帶のまゝ飲んでゐる　乾坤
別莊の卵鞄で持つてかれ　悟郎
嫁の里から地玉だと使ひ來る　眠職
無雜作にせんべ屋卵割つてゐる　萬よし
卵屋を眞似て母親一つ買ひ　辰進子
風邪聲に父の藥は卵酒　憲翠
支那卵生では吸へぬものにされ　凡平
洋食をけなし卵ごぢが出來　天花
病み上り蠅の卵に眼が屆き　迷村
また念を押して卵へ錢を出し　笑郎
御見舞の卵達者な子がせがみ　秀哉
見舞品やはり卵にすると決め　炭車

林田馬行
矢田右大臣　共選

あの村で舊家と聞いた嫁の里　青影子
きりぐ〜す舊家の塀の中で鳴き　一聲

(十三頁よりのつゞき)

(39)　龜井花童子

(一)龜井六郎(二)花童子(三)花玉門(四)函館年青柳町五〇(五)明治廿六年二月二日生(六)貸地業(七)「直つすぐに歩けば人に突當り」一十千榛(八)中肉中背にして從順な女(九)「ポイントのとこで一搖れ眼をさまし」(一〇)長唄、芝居、落語(一一)有(一二)趣味を餌に鯛を釣る奴(一三)大正三年春

(40)　三浦太郎丸

(一)三浦太郎丸(二)太郎丸(三)五つ程あり(四)東京市ト谷區下根岸町七九番地(五)明治二十年八月十四日生(六)商人(七)年を取る度に動く(八)てきぱきしてればよろし(九)毎日變はる(一〇)芝居を見ること(一一)一人有り(一二)喧嘩、理屈つぽい奴(一三)大正三年

(41)　大菅文錢

(一)大菅新太郎(二)文錢(三)梅榮堂、白童迂人、芳碧生(漢詩の方で)瀟水軒虹雨(四)京都市諏訪町通五條下ル(五)明治二十年八月十八日生(六)綿、毛織物卸(七)古今を通じて廿句位ありませう(八)色は黑ふても志操の正しい日本固有の毒婦型

村近く寺と舊家の屋根が見ゑ　山月
文化村舊家へ當てたやうに建ち　露斗
虫干に會津へ行つた鎧も出　濁水
舊家の屋根にアンテナを見る　花泉
大樟を傘に時代のついた家　仰天子
世を隔つやうに舊家の高い塀　白蝶
表から見れば舊家は留守のやう　のほる
舊家だと云ふ塀だけがまだ殘り　寢多樓
死に絶えた舊家話の種となり　逸錢
舊家の子親に背いて町に出る　同
裏庭へ廻れば舊家栗や柿　吐露樓
金の要る話に舊家數へられ　同
減もせず殖えたやうにもない舊家　突支坊
良緣がまとまりにくい舊家なり　同
富山から藥を入れてゐる舊家　凡平
十代も九郎兵衛さんで續く家　同
村一の舊家とか云ふ大銀杏　天花
貝舊家だけで屋敷に草が伸び　同
そのかみのそゞろ偲ばる土用干　十字路
舊家と云ふ事を忘れず記者は書き　同
藏の壁だん〳〵落ちてゆく舊家　聞路
武者窓をガラスに替へた舊家也　同
紙屑屋舊家の勝手心得へる　悟郎
御近所の小火を舊家は後で知り　同
式作法昔乍らの御家柄　乾坤
世が世ならぬと舊家に雨が漏り　同
邸跡だけ桑畑にして殘り　萬よし
鐘樓の石に刻んだ初代の名　同
炊き出しの釜を舊家で借りて來る　秀哉
改築をちと借しまれる舊家なり　同
儲けたと見せぬ舊家の壁の色　同

佳吟

舊家の灯奥の奥からもれて來る　青影子
舊家また展覽會に貸してや　吐露樓
因業な先祖もあつた舊家なり　多聞
床の間へ舊家は飾るものがあり　聞路
門の音に舊家の朝となり　十字路
駐在所舊家へ判を押しに來る　悟郎
日當りの惡い舊家の應接間　秀哉
廣告もせない舊家の品が賣れ　同
年末を舊家は早いすゝはらひ　凡平
舊家まで來て郵便はもとの道　同

(九)まだなしもつと〳〵勉強して自信のある句を作りたいと思ふてゐます(一〇)文藝一切(殊に漢學並びに日本古文)圍碁落語、旅行、食道樂、聲樂(殊に淨瑠璃並びに薩摩琵琶)外に毎晩一合(一一)有(一二)ゐらばる人、うけ判、博奕打つ人、蛇(一三)明治三十八九年頃、廂髪、式部星やすみれの流だつた時分一二年年を染めてゐましたが永らく中絶、大正十一年春から眞面目に研究し出しました。

(42) 神崎一閑子

(一)神崎稔(二)一閑子(三)閑太夫(四)神戸市生田町四丁目七三(五)明治三十四年四月二日生(六)晝は小役人夜は囑託教師(七)「下宿でもしてゐるやうな部屋の父」路郎(八)丸顔に愛嬌があり氣分の明るい肉體美の女日本髪に結ふた黑襟下町風の服裝で(九)乍遺憾一句もなし(一〇)あれもこれも皆趣味にして隨分多し(一一)有(一二)氣障なお世辭、叱言(一三)神戸又新柳壇への投句から、大正十年春頃

(43) 高橋古城山

(一)高橋幾壽(二)古城山(三)澤山あり其時代に依つて相違す柳太刀同人時代はみなと庵、樂書當時には但馬守又は湧一郎

(軸)累代家の暗さと土の香と　馬行
舊家ですと眠つた樣な家を指し　同

◇　右大臣選

舊家まだ庭へお米を積んだまゝ　眠聲
黑ずんだ床に飾つた鎧櫃　仰天子
名ばかりの舊家に廣い家屋敷　乾坤
何事も舊家にまかす寺の事　辰進子
落ぶれたことを自慢の舊家なり　萬よし
村名と姓も同じ舊家なり　一聲
豪傑は舊家の採めを任される　南天棒
死に瞑ふた舊家話題の種となり　逸錢
大隊長だけが舊家で泊るなり　枝呂
良緣が纏りにくい舊家なり　突支坊
因業な先祖もあつた舊家なり　多聞
やをゝ筆をとつて舊家の奉願帳　同
平民は平民として舊家なり　凡平
舊家まで來て郵便はもとの道　同
舊家又展覽會に貸してやり　吐露樓
佛壇の燦然として舊家なり　同
先樣は舊家と言つて貴ひに來　寢多樓
舊家だと聞く先樣の片田舍　同
舊家から舊家へ嫁の荷がとゞき　青影子
横町もずつと舊家の借家なり　同
開け行く町に舊家のせばめられ　白蝶
時世に逆はず舊家繁昌し　同
奉祝に舊家陣笠貸してやり　山月
村近く寺々舊家の屋根が見え　同
今年から舊家ピアノの音がする　悟郎
舊家の名驛前の俥夫心得る　同
舊家から舊家へ嫁の荷がとゞき　聞路
財産の事で舊家がもめるなり　同
門の音に舊家の朝となり　十字路
新知識可惜舊家に生れて來　同
白壁の汚れた色も舊家なり　秀哉
光榮に浴する舊家の忙しさ　同
改築に舊家だん〳〵みとめられ　同
(佳)零落れて由緒を語る痛しき　乾坤
(佳)人のいゝ舊家株なゞすゝめ　幽里
(佳)御先祖の名をかゝま舊家なり　逸錢
(佳)倉一つ賣って舊家と醫者が出來　普天
(佳)舊家から見る此村の變り樣　のぼる
(佳)舊家又代表と言ふ小作が來　同

白扇當時は橘生、又は草舍主人　但し草舍主人は現在にても時折使用す(四)大阪市東成區中濱町三五〇(五)明治二十八年の紀元節に生る(六)洋服屋(七)迚も澤山で見當がつきません(八)肥つた女よりも痩形の女の方薄化粧するも濃い目に塗つた方がいゝ。水谷八重子に河原市松も加味した少し淒艶味勝つた女が好きだ但しどんな女を見ても十數年前の初戀の女には優るやうに思へない(九)非常に澤山あります(十)歡劇もいゝが自分達斗りでする素人演劇が好きだ(此病のの爲に神戸川柳家諸氏に大變心配させた)他に撞球圍碁籐八拳等(十一)空想や理想とは全るで反對なのが最近に有り(十二)頭髮と口の臭い女、無駄口を喋る女、疑ひ深い女氣の利かぬ女、男を馬鹿にする女、泣かぬ女等々(十三)大正四年秋頃から春汀と號して講談倶樂部へ投吟したのが始め同六年春に古城山と改號してから偶々講談倶樂部に入賞したのがそも〳〵熱が出た初まり。

玩具箱

省二生

（十一）鍋祭

石丸梧平氏作、戯曲『戀愛異論』（人生創造掲載）の一節。

（A）僕はいつの間に又こゝへ來て居たのだ、三枚の鍋を被つて居る妻が、そこで其有段の下で、靜かに禮拜して居たのだ、悲しそうに禮拜して居たのだ、いやそうではない恐らく冷靜だつた、神の前でも尚ほ耻ないと言ふ樣な冷靜さを持つて居た、いやそうでない、彼の女は、確かに悲しんで居た、そんなずうずうしい女ではない、彼の女はほんとうに私を愛して居るだらうか、愛し居るなら何故三枚の鍋を被つてゐたのだ、十二の時からあんなに注意して、彼の女の純潔そのものを、自分の生命の如くにして、そして結婚したのだ、彼の女はまだやつと十七才だ、それだのモウ三枚の鍋を冠つて居る、……

私は今夢を見た、神樣はかう言つた、もう好い加減にあきらめろ、人間と云ふやくざ者に、そんな純潔が保たれるものか考へてみろ、さう云つて神樣は笑つた、あきらめろと云ふのは、つまりアノ妻をもともと通りにせよと云ふ事なのか、妻がいくら姦通しても、夫れは仕方がないと言ふのか、夫れが人間の眞の姿で、人間の姿は夫れ程醜いものだと言ふのか、わからん、わからん、あの美しい妻が醜い姦通女、夫れがあたりまへだから、モウあきらめろと言ふのか、わからん——

（丙）若旦那あんまり生一本に思ひつめるものではありません、みんながさう云つてるますぜ　若旦那はあまり正直過ぎるからだつて——そんな事にくよくよせずに、若旦那の力でならば　來年のお祭には女の頭の鍋の數を　いくらでも增やせるぢやないかと、……

筑摩社は近江國坂田郡に在つて、御食津神、大歲神、倉稻魂神を祀り孝安天皇の御宇に創立さる、里女婚する時は祭禮に必ず釜鍋を頂いて神に奉ずと、一月午の日農具を供ふる神事があり、四月八日乙女が紙製の鍋を被つて神に奉仕する式がある　歲時記栞草に雜和集を引いて、近江國つくまの明神と申す神おはします、其神の御誓にて、女の男したる數にしたがひて、鍋をつくりて其の祭の日奉る也、男あまたしたる人は見ぐるしがりて少し奉りなごしつれば、物のあしくてやみなごして、あしければ數のごとくし

て、祈らば祈りなごすら也、、、

祭禮に誠あらはす鍋一つ
親心一つは鍋もかぶせたし

お祭がいやさに美濃へ嫁入する女にどうをはたかせる神事なり
手にさげるよりもせつない鍋祭
すりこ木をさすべき筈を鍋かぶり
筑摩祭に出るやうな御弟子なり

（十一）牛

出雲飯石郡の牛供養　山城太秦の牛祭、神樣と牛とは密接な關係がある　撫牛、首振牛等は性的表象玩具として研究されて居るが、天神と牛はつきものになつて性的にも無關心のものではない、近時、天神樣が或る種の女の歸依崇拜するは、菅公が梅樹を愛せられた事から、ウメは梅毒の梅に通じて下の病の治癒を祈願する、治らば梅の木を寄進する　或は菅公は文筆の神のゆゑ　筆ミリンがの表象關係もあると謂にも一居る　斯ふなると神樣は御迷惑なわけ、神主は結構なわけとなる、此の風習は恐らく天神藝者とが、こんがらかつたのであろう。

いつの間に誰が植ねたか安樂寺
梅が香にはてなはてなと安樂寺
さんだ儀が御座りました安樂寺

道眞公延喜二年筑前の配所で　心ならず逝かれた折り、棺を牛に曳かせ三笠郡の四堂邊の墓所に運ばむとするに、安樂寺前に於て牛が動かぬので、そこを墓所としたと云ふ說で、生前道眞公が安樂寺の地を好むで居られたので　牛は夫れを知つて居て一歩も動かなかつたのだと傳はられてゐる、天神・牛との一エピソートであるが、天神は必ずしも菅公とのみ限られたわけではない

二浦博士の『日本史の研究』に短い文がある　夫れを略記してみる　菅公のある以前、朝廷にては諸國の天神卽ち遠江の小國天神　讃岐の賀茂天神に位階を授けられた　素盞嗚尊を祭る祇園神社が祇園天神・小石川牛天神以外に愛宕郡高野鄕總社八所御靈の攝社に、牛御前あり、向島に牛御前の社がある、之等は素盞嗚尊を祭り、牛頭天王とも稱する』と、

下戸向の神樣牛の御前なり
牛の御前でのろついて息子ゆき（狂）
牛の御前樣だとかけぬける

建長の頃淺草川から牛鬼が出て、民家をなやます頻なれば、神と祀り上げたとの傳說が專らであるが　博士の文に、『向島の牛御前は牛島の總鎭守で、牛島を略して牛の御崎と呼び　何時しか牛の御前となつたとの說、及び大御前と言つたのを、牛の御前と轉訛したとの說、就中面白きは日本紀や萬葉集に、大人とかいて『ウシ』と讀むから、牛の御前の牛は借字で、ウシは一種の尊稱である、牛は獸類中體軀偉大、農牧に貴重視せられ、牛の借字で大人の意に通はせたものであらう、此ウシ天神論で異說を立てたのは、荻生徂徠の『南留別志』に

『牛天神は物部大人なるべし、大人をウシと讀むは日本紀に見ゆ

と記して牛天神は菅公にも素尊にもあらず、物部天神であると云ふ』と、

編輯後記と私の事ども

▲急に寒くなつて來ましたね。今年の冬は寒さのレコードを破ぶるんださうですが、何んでもレコードで行うとする、近代人にも困まつたものですね。

▲私は夏からの疲れを九月に入つてから痛切に感じてゐましたが、兎に角無理に押し切らうとして失敗しました。月末には好きな酒に先づ味を失ひ續いて煙草が喫め なくなりましたそして十月の一日から、さう〳〵寢込んで了ひ二週間ぶッ通して臥床、同人や柳友に大變御心配をかけました。幸ひもう起きてぼつ〳〵働いてゐますから御安心願ひます。わざ〳〵御見舞下さつた方や、見舞狀を頂いた方にあつく御禮を申上げます、病氣の原因は放馬君の手紙にあるやうに、酒の祟りではなく過勞から來てゐるのですからこれまた御安心を願ひます。

▲私が少々寢込んでも、同人諸君が非常に活躍してくれるので編輯上には何等の 支障を來たさず、十一月號も從來通り發行日より早く出すことが出來ました。唯漫畫を載せる事の出來なかつたのは遺憾でしたが、記事とし

◇十一月例會◇

時日　一日午後六時
會場　大阪市南區清水町市電停留所西入　端の坊
兼題　「行商」三句　路郎選
會費　金貳拾錢
同好者の來會を歡迎いたします

ては劍花坊氏の「革新の第一義」半文錢氏の「馬行君の白い色を見る」山椒氏の「本事川柳」東魚氏の「柳樽通釋異見」省二氏の「玩具箱」などそれ〴〵 獨自の妙筆を揮はれて居りますので充分讀みこなへのある事を 喜んでいただきたい。

▲次に少しく同人の消息を申上げますと、雅幽君は私歇山へ一週間許り歸り、化童子君は私用で十日間程 東京まで出て來られましたが當地へ來られる機會がありませんでした。芦穗君は公用で東京、横濱、名古屋 の一週間の旅、東京では支部の柳路君に逢はれたさうです。美の作君は令息が健康を害されてゐるので御心痛ださうです、早く全快される事を祈ります。莢豆君は西宮市興古道町三二で黒木寫眞館を開業、松雨君は大阪市東淀川區南濱町一九四地へ移轉されました。二木幸堂君が一身上の都合で暫く 川柳から遠ざかられることになりましたので 同人を辭されました。その他の同人は相變らず元氣です。

▲蛭子省二氏は、近來又々持病で苦しんでゐられるさうですが同氏のためにも、本年の寒さが嚴びしくないことを祈ります。

▲白石維想樓氏の母堂が九月十二日に 長逝されました。お悼み申し上げます。

▲前田雀郎氏等によつて柳誌「みやこ」を發行してゐた東京の都川柳會は今回解散し「みやこ」は都吟社の名で雨吉、顏丸兩氏により續刊するとの事。▲京都から近く柳誌「對照」が發行され(京都市木屋町四條上る布部幸男方)▲神戸からは柳誌「覆面」(神戸市北長狹通八丁目九七)が發行されるさうです。

▲十月二十二日加古しげる君、東京から歸阪來社▲田中一左君は三平と改號(路郎生)

▲道頓堀川にかゝつた日本橋を南へ渡つて半丁も行かないところにある古本屋です

▲主人公藤堂氏は愉快なおぢさんです。とても古本屋のおぢさんとしては珍らしい人です。

▲古本を漁りながらいろんな話をしてゐれば道頓堀を歩いて來た感じが流れるやうに出て來ます。

▲こゝの特色としては、どんな本でも蒐めてあること、値段のところはまかしておいても安心して買へると云ふこと買ふとか買はぬとか云ふことを問題にせずに愉快に本を見られるといふことです。

▲せいぜい主人公とお馴染になつて下さい。探して貰ひたい本があれば頼んでおきさへすれば出來るだけ便宜を與へて貰へます(路郎生)

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第三卷第一號課題

十一月十日締切

（各題二十句以内）

▼太陽　井上劍花坊選

▼夫人　塚崎松郎選

▼紋付　岩崎柳路　森田輝翠　共選

第三卷第二號課題

十二月十日締切

（各題二十句以内）

▼大根　篠原春雨選

▼手袋　矢田右大臣選

▼海軍　井上刀三　高橋かほる　共選

毎號募集

▼近作柳樽（五十句以内）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）　編輯局選

▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀、廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

一部　參拾錢（郵税共）

六部　壹圓六拾錢

十二部　參圓

廣告料

本誌の廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年十月廿五日印刷　第二卷第十一號（毎月一回一日發行）

大正十四年十一月一日發行

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四四番地　麻生幸二郎

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四四番地　川柳雜誌社　振替口座大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）明文堂　公立社　柳屋

（東京）東條　（京都）三宅　（神戸）米田

（金澤）石井　（松任）三須　（函館）石塚

武笠山椒氏著

〔最新刊〕

柳風柳樽通釋

第一編
第二編　各全一冊
四六判總クロース頗美裝
正價各金參圓
送料各金拾錢

絶大好評二編出づ

川柳は我が文藝上に一異彩を放つ所の警句文學である。僅々十七文字の中にあらゆる社會相を活躍させて辛刺骨を刺すの概がある人生の側面は人生の裏面は否その焦點を諦視した人生はまさ〳〵とその十七文字の上に展開してゐる。然るに川柳の精華たる柳樽は德川期の社會相を端的にその對象としてゐるが爲めに語意に於て內容に於て吾々の理解を妨げる所が尠くない。川柳の研究が兎角に斷篇的であり勝ちなのも、一つは斯うした事情に餘儀なくされた結果であらう。著者はその至大の蘊蓄を傾倒して柳樽初篇及び二篇の句をそれ〴〵各一卷に收めて平押しに全釋した。幾多の挿畫を入れて德川の世相をも示した。斯くて吾々の川柳は今やほんとに吾々のものとなつたのである。

東京市神田區錦町一丁目

有朋堂書店

振替東京七一四八番

大阪十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大阪十四年十一月二十五日印刷　大阪十四年十一月一日發行

第二卷　第十一號（第二十二號）

定價金參拾錢

清酒

よろこびにそへて白鶴届けこき
榮轉の今日も白鶴呑み續け
白鶴がいつものバーへ運ばせる

白鶴

攝津灘
嘉納合名會社釀